

はじめに

土木学会誌編集委員会

土木学会は 50 年の歴史を迎えました。そしてつぎの 50 年へと足を踏み入れたのです。われわれはこの輝かしい将来に望んでなにをなすべきか、また、どうなっているかを考えてみたいのです。

まず土木界の「今日に至るまで」を振りかえりました。つぎに将来を望むのですが、土木、それが人間の生活を豊かにするための一つ的手段とみられるからには「つぎの時代の生活」がどうなっているかを考えてみなくてはなりません。それを念頭においた上で「つぎの時代の土木」の素描がはじまります。ここでは将来のあるべき姿とあるであろう姿が展開されるのですが、いずれにしても実現の原動力は人とその知脳です。そして「つぎの時代の研究」はどうあるべきであり、また、「つぎの時代の土木技術者」になにを望むかを明らかにしておくこととなります。

この特集「土木界—これからの課題」はこのようにして組立てられました。そして執筆者として多くの方々の参加をお願いし、少数の方には口述していただきそれを要約しました。述べつくせないほど内容があるのに限られた字数に圧縮もしました。目標の時期が 20 年後にも、21 世紀にもなりました。同じテーマが何人かの執筆者によって語られました。もしそれが読みとられなかったら、それは編集企画の不手際です。また、いくつかの挿絵を行間に入れました。将来へのイメージを抱く足がかりにもと考えてみたものであり、その前後の文章とその内容には関係ない場合もあります。ここにあわせてお断りします。

話がどうも先すぎる、何もあわてて今考えなくてもとの批判があるかも知れません。しかし、ついこの間であったと思った戦争から、もう 20 年もたっています。21 世紀もあまり遠くはありません。やはり現在が準備の出発点です。将来の予測となると内容に異論もありましょう。ここでは会員各位のお考えのひとつの糸口になればと考えました。

たかだか年率 6% で経済が伸びたとしても 30 年間には 10 倍近くになります。それに応じて伸びる建設事業の担手は誰かというとはかならず本会会員の諸兄なのです。そして技術者数が事業ほどに伸びる見込みのないこともほぼ明らかです。つまり、今の数倍の仕事を質、量ともに世間はわれわれに期待するでしょう。

いずれにしても、将来にそなえて大いに腕を磨いておかななくてはならない、これだけは確かだと考えました。

その時期にあたってこの特集が会員各位にとってなにかのご参考にでもなれば望外の幸せです。